



AITの学生たち。国籍も年齢も関係なくさまざまな人がここで学んでいる

AITの学部・学科一覧

工学技術学部 (SET)

- Construction Engineering and Infrastructure management (建設工学 / インフラ・マネジメント)
- Geotechnical and earth resources engineering (地盤と地球資源システム工学)
- Structural engineering (構造工学)
- Transportation engineering (輸送工学)
- Water engineering and management (水工学 / マネジメント)

環境・資源開発学部 (SERD)

- Agricultural systems and engineering (農業工学)
- Aquaculture and aquatic resources management (水産・水産資源経営学)
- Energy (エネルギー)
- Environmental engineering and management (環境工学経営)
- Food engineering and bioprocess technology (食品工学 / 生物化学技術)

- Gender and Development studies (ジェンダーと開発学)
- Natural resources management (天然資源経営学)
- Pulp and paper technology (パルプ / 製紙技術)
- Regional and rural development planning (地域 / 農村開発計画学)
- Urban environmental management (都市環境経営学)

経営学部 (SOM) ※ 学科なし

専攻によると思いますが、環境資源開発研究科では、国連関係やNGO、また政府や大学 / 研究機関に入る卒業生が多いです。私はジェンダーと開発を専攻で教えていますが、南・東南アジアのジェンダーと開発の要職はAITの卒業生がかなり占めています。例えば、アジア開発銀行 (ABD)、国連女性機関 (UNWomen)、国際協力NGO

協定を締結していますが、日本からもっとたくさんの方に留学しにきてほしいと思っています。工科大学ということで敬遠されてしまっているのかもしれないし、AITは国際大学院なので、タイの大学としては紹介されていますので、日本ではあまり知られていないのかもしれない。しかし、AITに留学してくる日本人の学生は企業からの派遣や博士号取得のためなど、皆しっかりと目的を持ってきますので、面白い学生が多いですよ。

卒業した後はどのような活躍をしている方が多いのですか？

AITの卒業生は8割以上が自国に戻って仕事をしています。しかも、エリートと言われる要職に就く人が多いのも特徴ですね。つまり、自国の優秀な人材が国外に流れるというような頭脳流出には加担していません。設立の目的どおり、自国ががんばってもらう人材を育てたいと思っています。

のCARE、国連開発計画 (UNDP)、国際労働機構 (ILO) などのジェンダー担当者や女性省の幹部、国会議員になった卒業生、民族解放の活動家となり、民族の代表としてオバマ大統領に会った卒業生もいます。

目下部先生の専門分野を教えてください

ジェンダーと開発学が専門です。特に女性の経済的エンパワーメントで、地域的にはカンボジア、タイ、ラオス、ミャンマーがメインです。現在はこの地域の経済統合とその影響について、ジェンダーの視点から、特に国境付近に焦点をあてて研究しています。



目下部 京子

環境資源開発研究科ジェンダーと開発学専攻准教授。大学勤務前はカンボジアのNGO勤務。その後、国際労働機構 (ILO)、国連開発計画 (UNDP)、世界銀行、国際協力機構 (JICA) などの仕事に携わる。2012年はバリ政治学院客員教授。近年はジェンダーと労働移動、東南アジア経済統合のジェンダー・インパクトについて研究。上智大学・外国語学部英語学科卒業、アジア工科大学院修士・博士



AIT

Asian Institute of Technology

研究教育活動をアジアからリード! 国際色豊かなアジア工科大学院に迫る

1959年に設立されたアジア工科大学院 (Asian Institute of Technology、以下AIT)。南・東南アジアを中心に、日本やヨーロッパ、アフリカなど世界中から学生が集まる国際大学院大学だ。今までに100名ほどの日本人学生がこの大学院を卒業しており、現在も日本からの留学生がここで学んでいるほか、日本人教員も3名が所属している。世界中から優秀な学生があつまるAITの活動とその魅力に迫る。

AITはバンコクから北方に40キロメートルほどの、パトゥムターニ県に位置している。近くにはタマサート大学やバンコク大学のキャンパスが隣接しており、AITはその一角に広大な敷地を有するキャンパスを構えている。このキャンパス内には、銀行や郵便局、診療所、コンビニエンスストアなどといった日常生活に必要な施設はもちろん、宿泊施設、プール、グラウンドのほかにゴルフコースまで設けられている。

AITで修士、博士号を取得し、現在は同校で教鞭を執っている日下部京子先生に「AITについて」話を聞いた。

「どのような特徴を持った大学院なのでしょう？」

設立の経緯でもありますが、アジア地域の開発・発展に寄与することがこの大学院の大きな目的です。ですので、漠然と理論を学ぶのではなく、いかに知識をアジア地域の実情にあうようにアジャストするかを重視しています。また、比較的小さい大学院ですので、あらたな分野を試験的に教えていく事もでき、他の大学と比べて教育のイノベーションが自由にできる大学です。

もともとは工学系の大学として始まりましたが、アジアの開発に寄与するにはもっと包括的なアプローチが必要ということで、現在では社

会科学やマネージメントもカバーしています。現在、学部は工学技術学部 (School of Engineering and Technology)、環境・資源開発学部 (School of Environment, Resources and Development)、経営学部 (School of Management) の3つが柱になっています。AITは大学院大学ですので、教育と研究がメインになっており、多くの学生が研究に参加しています。また、アジアの開発に関わる大学として、実際の開発現場での仕事に同校の教官やスタッフが携わっているため、実践に関わることができる学生も多いです。

企業や政府機関などから派遣されている学生も多く、すでに社会人経験のある人達がほとんどです。それぞれの実践での知識と経験を持ってやってきますので、講義からだけでなくクラスメイトからの学びも大きいです。また、「AITには外国人が少ない」といわれるほど、学生の国籍は多様化しています。つまり、多数を占める国籍の学生がいないということです。普通ですと、その国の学生が多くなりますが、AITの場合は、必ずしもタイ人が多数ではありません。例えば今、私が教えているクラスでは、タイ人が8%、ミャンマー人とネパール人が25%を占めています。また、講義及び学内での生活はタイ語ではなく、すべて英語で行われています。また、当校は全寮制(入学後1年間)で、敷地内には寮もあります。

「どのような学生がどのような国から学びに来ているのですか？」

大半が南・東南アジアからです。ベトナム、パキスタン、ネパール、バングラデッシュ、ミャンマーから環境・資源開発を学びに来る学生が多いです。他にもアフリカやヨーロッパからの学生もいます。ヨーロッパからは特に、大学間協定もあるので、短期の交換学生も来ています。

現在、日本の大学では、北海道大学、お茶の水女子大学、山梨大学、北陸先端科学技術大学院大学、佐賀大学、国際連合大学などと大学間



カンファレンス・センターにある記念プレート